

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごどのごししょうそく

四糸金吾殿御消息

新版
1516
ゝ
1517

しじようきんごどのごしようそく

四条金吾殿御消息

ぶんえい

ねん

がつ

にち

さい

しじようきんご

文永 8 年 ('71) 9 月 21 日

50 歳

四条金吾

たびたび

おんおとずれ

もう

尽

そうろう

い

度々の御音信、申しつくしがたく候。さてもさても、去

じゅうににち

なん

きへん 竜

口

連

たま

ぬる十二日の難のとき、貴辺たつのくちまでつれさせ給い、

はら

き

おお

しかのみならず、「腹を切らん」と仰せられしことこそ、

ふしぎ

もう

不思議とも申すばかりなけれ。

にちれん

かこ

さいし

しよりよう

けんぞくとう

ゆえ

しんみよう

す

ところ

日蓮、過去に妻子・所領・眷属等の故に身命を捨てし所

幾

いくそばくかありけん。あるいは山にすて、海にすて、あ

やま

うみ

かわ

磯

とう

みち

辺

るいは河、あるいはいそ等、路のほとりか。しかれども、

ほけきよう

だいもく

なん

法華經のゆえ、題目の難にあらざれば、捨てし身も蒙る難

とう じようぶつ

じようぶつ

す

等も成仏のためならず。成仏のためならざれば、捨てし

うみ かわ ぶつど

海・河も仏土にもあらざるか。

こんど ほけきよう ぎようじや

るさい

しさい

およ

るさい

い

今度、法華經の行者として流罪・死罪に及ぶ。流罪は伊

とう しさい

そうしゆう

竜

口

にちれん

いのち

東、死罪はたつのくち。相州のたつのくちこそ、日蓮が命

す ところ

ぶつど

劣

ゆえ

を捨てたる処なれ。仏土におとるべしや。その故は、すで

ほけきよう ゆえ

きよう

い

じっぽう

ぶつど

に法華經の故なるがゆえなり。經に云わく「十方の仏土の

なか いちじよう ほう あ ところ

中には、ただ一乗の法のみ有り、この意なるべきか。こ

きようもん

いちじよう

ほう

と

たも

ほけきよう

の經文に「一乗の法」と説き給うは、法華經のことなり。

じつぽうぶつど

なか

ほけきよう

ほか

まった

ほとけ

十方仏土の中には法華經より外は全くなきなり。「仏の

ほうべん

せつ

のぞ

み

にちれん

なん

遭

方便の説を除く」と見えたり。もししからば、日蓮が難にあ

ところ

ぶつど

しやばせかい

なか

にほんこく

にほん

う所ごとに仏土なるべきか。娑婆世界の中には日本国、日本

こく

なか

さがみのくに

さがみのくに

なか

かたせ

かたせ

なか

たつ

国の中には相模国、相模国の中には片瀬、片瀬の中には竜の

くに

にちれん

いのち

留

置

ほけきよう

おんゆえ

口に日蓮が命をとどめおくことは、法華經の御故なれば、

じやつこうど

じんりきほん

い

りんちゆう

寂光土ともいふべきか。神力品に云わく「もしは林中にお

おんちゆう

せんごくこうや

いても、もしは園中においても、もしは山谷曠野にても、

なか

ないしはつねはん

この中に乃至般涅槃したもう」とは、これか。

にちれん

伴

ほけきよう

ぎようじや

はら

き

かかる日蓮にともないて、法華經の行者として腹を切ら

宣

こうえん

はら

割

しゅ

いこう

肝

んとのたもうこと、かの弘演が腹をさいて主の懿公がきも

い

ひやくせんまんばい

にちれん

を入れたるよりも、百千万倍すぐれたることなり。日蓮、

りようぜん

詣

しじょうきんご

ほけきよう

おんゆえ

靈山にまいりて、まず「四条金吾こそ、法華經の御故に、

にちれん

はらき

もう

そうろう

もう

あ

そうろう

日蓮とおなじく腹切らんと申し候なり」と申し上げ候

べきぞ。

鎌

倉

殿

おお

ないないさどのくに

遣

またかまくらどのの仰せとて、内々佐渡国へつかわすべ

よしうけたまわ

そうろう

さんこうてんし

なか

がってんし

ひか

もの

き由 承り候。三光天子の中に、月天子は光り物と

現

たつ

くち

くび

助

みようじようてんし

し

ごにちいぜん

あらわれ竜の口の頸をたすけ、明星天子は四・五日已前に

くだ

にちれん

げんざん

たも

につてんし

残

たも

さだ

下つて日蓮に見参し給う。いま日天子ばかりのこり給う。定

しゅご

めて守護あるべきかと、たのもし、たのもし。

ほっしほん い

すなわ へんげ ひと つか

法師品に云わく「則ち変化の人を遣わして、これがため

えご な

うたが

あんらくぎようほん い

に衛護と作さん」。疑いあるべからず。安樂行品に云わく

とうじよう くわ

ふもんぼん い

かたな っ

だんだん お

「刀杖も加えず」。普門品に云わく「刀は尋いで段々に壊

きようもん

そらごと

そらら

ごうじよう

れなん」。これらの経文、よも虚事にては候わじ。強盛の

しんりき

そらら

きようきようきんげん

信力こそありがたく候え。恐々謹言。

ぶんえいはちねんくがつにじゅういちにち

にちれん

かおう

文永八年九月二十一日

日蓮

花押

しじようきんごどの

四条金吾殿